

Title	2016年度藝文学会シンポジウム「戦争と文学」：はじめに
Sub Title	Symposium : War and literature : introduction
Author	杉野, 元子(Sugino, Motoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.112, (2017. 6) ,p.121 (126)- 123 (124)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2016年度藝文学会シンポジウム「戦争と文学」 開催日: 2016年12月16日 (金) 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01120001-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2016年度藝文学会シンポジウム

「戦争と文学」



日時：2016年12月16日（金） 15:00～17:00

場所：三田キャンパス北館ホール

講師：関根謙（本塾大学文学部教授）

譚璐美（作家・本塾大学文学部訪問教授）

長堀祐造（本塾大学経済学部教授）

司会：杉野元子（本塾大学文学部教授）

はじめに

本日は、この冬一番の寒気が流れ込み、真冬並みの寒さの中、お集まりいただき、ありがとうございます。私は司会を務めさせていただきます、文学部中国文学専攻の杉野元子と申します。よろしくお願いたします。

本日のシンポジウムのテーマは「戦争と文学」ですが、なぜこのテーマにしたのか、最初に簡単にご説明申し上げます。このホールの入り口に『藝文研究』最新号が置いてありましたが、この号は文学部中国文学専攻・関根謙教授の退任記念号です。表表紙には南京の「挹江門」の写真、裏表紙には作家阿瓏の代表作「南京」の原稿の写真が載っています。この二枚の写真は、関根先生ご自身に選んでいただいたものですが、関根先生にとって、阿瓏の小説「南京」との出会い、その後の研究人生を大きく決定づける、衝撃的なものであり、だからこそ、この二枚の写真を選ばれたのだと思います。小説「南京」は、日本軍による南京陥落を描いた作品ですが、関根先生ご自身が翻訳なさり、『南京慟哭』（五月書房、1994年）というタイトルで出版されています。そこで今回のシンポジウムでは、関根先生にとって研究の大きな柱となっている阿瓏文学に関連させて、何かテーマを設定できないかと考え、「戦争と文学」というテーマに決めました。

中国では19世紀末から20世紀前半にかけて、戦火と流血が絶えることがありませんでした。とりわけ日中戦争は、1931年の満州事変から45年の終戦まで、14年もの長きにわたっています。20世紀を生きた中国の文学者にとって「戦争」というのは、避けて通ることのできない大きなテーマです。本日のシンポジウムでは、中国の文学者が、戦争とどのように向き合ってきたのか、作品の中で戦争をどのように表現してきたのか、などといった問題について、考えてみたいと思っています。また中国の文学者に限定することなく、中国と戦火を交えた日本の文学者についても、同様の問題について考えてみたいと思っています。

では、講師の方をご紹介します。譚璐美先生は日中近代史を主なテーマとし

て、作家活動を精力的におこなっていらっしゃいます。最新作は『帝都東京を中国革命で歩く』（白水社、2016年）です。文学部訪問教授でもあられます。本日の発表では、清末から民国初めまでの時期を中心に、語っていただきます。

長堀祐造先生は、本塾大学経済学部教授で、主に魯迅とトロツキー周辺のことを研究なさっています。ご著書に『魯迅とトロツキー』（平凡社、2011年）があります。本日の発表では、1920年代後半から30年代前半の時期を中心に、語っていただきます。

関根謙先生については、先ほど少し触れましたが、主に中国抗戦時期の都市文学と海外華人文学を研究なさっていて、ご著書に『抵抗の文学—国民革命軍将校阿壠の文学と生涯』（慶應義塾大学出版会、2016年）があります。本日の発表では、1930年代後半以降の時期を中心に、語っていただきます。

それでは、譚先生、よろしく願いいたします。